

項 目	作 業 内 容
(1)ツバキ類の 管理	<p>(今月の作業のポイント)</p> <p>ツバキ類の病虫害の対策 ツツジ類の花後剪定、施肥、病虫害の対策</p> <p>5月27日高松气象台発表の1か月予報によると、向こう1か月の気温は平年並みまたは高く、降水量は多い見込みである。</p> <p>6月は春に伸びた新梢は成長を止め、枝を充実させる時期となる。また、花芽分化の時期となる。</p> <p>ア 病害の防除</p> <p>高温になると、炭そ病(葉に灰色でまわりが暗褐色の1cmぐらいの病斑が現れる)が発生しやすくなる。症状がひどくなると落葉するので、予防的に殺菌剤を1~2回散布する(4-4式石灰ボルドー合剤500倍等)。</p> <p>この時期に雨が多く、日当たり不良の場所でもち病が多発する。もち病(葉がもち状にふくれる)は、ふくれた葉が胞子で白く覆われる前に、被害葉を切除して廃棄する。</p> <p>イ 害虫</p> <p>食葉性害虫として、ハマキムシ類やチャドクガの発生がみられる。特に、チャドクガは毒毛を持つため、触れない。発生初期の幼齢幼虫は、葉裏で集団生活をしているので、摘み取り処分する。被害がひどくなると、殺虫剤を被害状況に合わせて散布する(DEP(ダイプテレックス)乳剤1,000~2,000倍、MEP(スミチオン)乳剤1,000~2,000倍、アセフェート(オルトラン)水和剤1,500倍等)。刺された場合は、患部を水洗いし、抗ヒスタミン配合の軟膏を塗ったうえで医師の診断を受ける。</p> <p>吸汁性害虫は、アブラムシ類、ロウムシ類(ツノロウムシ、カメノコロウムシなど)が発生する。アブラムシ類は、殺虫剤を発生状況に合わせて散布し、ロウムシ類は、見つけしだい竹ベラ、歯ブラシ等で除去する(アセフェート(オルトラン)水和剤200~400倍、またはNAC(デナポン)水和剤1,000~2,000倍等)。</p>



図1 炭そ病



図2 チャドクガ

項 目	作 業 内 容
(2) ツツジ類の 管理	<p>この時期までにほとんどの品種のツツジが開花する。</p> <p>ア 施肥 開花が終わりしだい花がらの除去とともに、お礼肥として等倍の化成肥料を植え込み面積 1 m²当たり 15 g 程度地表面に散布する。</p> <p>イ 剪定 開花が終わったら、花後できる限り早く刈り込み等の剪定をする。この時期以降の強剪定は翌年の花つきを悪くする。</p> <p>ウ 病虫害の防除 病害として、ツバキと同様、日照不足の場所でもち病等の被害が目立つようになる。できるかぎり被害葉をつみ取り廃棄するが、被害がひどい場合は、殺菌剤を発生状況に合わせて散布する（塩基性硫酸銅（Zボルドー）銅水和剤 500 倍等）。</p> <p>害虫として、風通しが悪く、降水量が少ない状況下では、グンバイムシ（葉の裏を見ると相撲の行司が持っている軍配に似た虫）の被害によりかすれた葉が目立つようになる。剪定により通風を良くし、灌水を行うことで発生密度をおさえることができる。被害がひどい場合は、殺虫剤を発生状況に合わせて散布する（MEP（スミチオン）乳剤 1,000～1,500 倍、アセフェート（オルトラン）水和剤 1,500 倍等）</p> <div data-bbox="1117 577 1465 824" data-label="Image"> </div> <p>図 3 もち病</p> <div data-bbox="1117 887 1471 1151" data-label="Image"> </div> <p>図 4 グンバイムシ</p>